

# 文化高知 17

## 地域文化の普請

清水泉

はじめて空路で高知入りした人から、

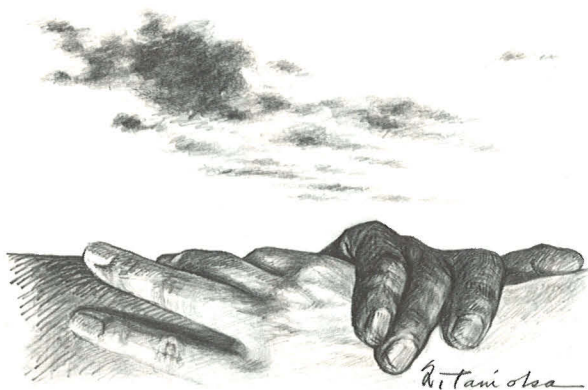
土佐の青い海や緑の山は、東京に近い伊豆や千葉にもあるが、空からピニールハウスを見ると白いカマボコを並べたように美しい、と言われたことがある。また、田植前の水を張った山間の水田が、鏡のように光ってきれいであったとも言った。

考えてみると園芸のピニールハウスや、山間部に水田のある風景は、土佐の景色から切り離せないものである。地元の人が優れていると思っている風光や文化と、県外から来た人の印象と比べると、何となくずれがある感じがする。

外国では自宅の庭に水泳用のプールのある家があるが、日本では少ない。しかし日本人の家の周りは、初夏の田植時に一面が「水田」という水のプールになる、という話がある。特に高知県は山間の田が多く、千枚田という耕して山頂に至るほどの小さい水田のある地区があり、昼は田ごとに太陽が反射し、夜は田ごとに月を映す風景になる。しかし最近では過疎化と減反政策で休耕田が増え、雑草に埋もれた田が目

につくようになった。

家を新築することを一般に普請と言いい、道をつけることを道普請、田の造成を田普請と言ったが、山村の古老か



谷岡 久

ら田普請の体験を聞いたことがある。まず山の傾斜地を耕し、近くの川から川石を運びあげて石垣をつくる。二宮金次郎の銅像の様な負いで運ぶが、

老人や子供も一個づつ抱いて運ぶ重労働であったそうである。

石垣ができると土を均し、谷川から水を引くが、もぐらの穴などからすぐに水が抜けてしまう。穴を見つけては固めることを何日もくり返し、水を入れて十日以上漏らなければ田普請の完成になり、神官を招いて家の棟上げと同じ神事をする。餅投げをすることもあり、三アールに満たない山田でも、家族中が小豆ご飯で祝うが、その喜びは生涯忘れることができないう話であった。

土佐は二十四万石といわれるが明治初期には五十万石近くになっている。どの田にも田普請の苦勞と喜びがあり、戦後まで続いた筈である。そして豊作を祈り祝う神祭があり芸能も生まれた。今は米余りの時代になり、地域の国際化が進む中で、過疎化と共に大都市へ人口も産業も集中し、土佐固有の文化も忘れられていく気がする。

もう田普請はないが、古い文化に新しいものを加え増成する地域文化の普請こそ、私達の責務と思う。

(高知相互銀行頭取)

今年の初めから、話題の売上税の問題で、忙しく振りまわされました。売上税そのものに反対とか云う訳でなく、非課税品目の中に「伝統芸等」とあり、歌舞伎、文楽、能等は非課税とされる、と発表されたんで、カチンと来ました。

伝統と云えば、寄席芸は、江戸初期から歌舞伎に負けない歴史を持ち、その芸を傳承しつつけています。歌舞伎等の為に国立劇場が造られたと同じ様に、寄席芸を守る為に、国立演芸場と云うものを造られたのですから、歌舞伎と同じ様に伝統芸として、非課税にして貰わなければと、仲間から声があがった。

抗議の集まりに誰か行って下さいと、理事会で決議された時、他の人が皆、仕事で行かれない、どこそこの余興に出演するとか、旅へ出ている、落語会を頼まれているなんて、それぞれ忙しい。私一人が丁度暇があった。

そこで、金馬さん頼む、になっちゃった。

さあ、一度抗議集会に出席したら、あとが大変。新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、売上税について御意見を、と朝駈け、夜討ち、と電話や、インタビュー。誰か他の人にと云うと、いや、金馬さんがその方の担当と云

われました、と云う。他の連中、面倒だから、全部私に押しつけちゃったんですな。

一時は、目の廻る様な騒ぎで、テレビで何か云ってるから、あいつはきっと詳しく知ってるんだらう、と勘違いした人が、売上税とはどんな税だか教えてくれ、なんて、とんでもない電話までかかってくるのには

すよ、御公家さん。この人が面白い話をしたと云う。その後、各大名に御伽衆と云う、お喋り屋が付きまとう。これ落語家の原生動物。曾呂利新佐工門なんて、有名な人もお伽衆の一人。

今から、四十年も昔になりますか、私の師匠、先代金馬と一緒に、高知博覧会の余興として行った時、私の故郷、和食でも、演芸会をやる事になりましたが、皆、ワッハハ……と、笑ってくれて、「落語とは、ナンチャナイ事を云いよる」と云われ、ギャフンとなりました。そのナンチャナイ事がおかしいんだよとムキになって説明したものです。

# 落語は伝統芸能

三遊亭 金馬

参りました。

その上、政治家の先生方の所へ陳情に行き、落語、寄席芸の歴史を述べろ、なんて、私学者じゃないから分からない。いや本を調べたり、大変な勉強をさせられました。

そも、落語の起源は、保元の昔、「宇治拾遺物語」を書かれた、宇治大納言が始祖になっている。大納言と云ったって、小豆じゃないで

かけ、中興の祖と云われる、三遊亭円朝があらわれ、今日の落語が完成する。

調べたら、私が思っているより、落語は歴史があるもんだ、と改めて感心したりしましたね。

ところで、ふる里高知は、落語に縁の薄い所です。つい先頃迄、落語会なんてのはあまり開かれた事が無かった。高知博覧会が開かれた時、

一昨年、県民文化ホールで、私の嘶を聞いてもらいましたが、大変若い方が大勢来られ、初めて落語を生で聞いたが、こんなに面白いものとは知りませんでした、と云われ、大分世の中も変わって来たね、と感じたものです。

土佐人は、生真面目なんですか、冗談を云うと、あいつは不謹慎じゃと云われる時代がありました。これじゃ落語家は相手にしてもらえない。吉田元総理は、洒落気のある人で、その言動が当時の土佐人に受け入れられなかったとか。今は落語もちゃんと聞いてもらえる様になって来ました。もっと寄席文化に親しんでいただきたいものです。

(落語家)

## ●高知おもちゃ図書館●

### 子どもと

### おもちゃの図書館

三橋 巖

おもちゃの図書館は、一九六三年スウェーデンにおいて、障害児をもつ二人の母親によるボランティア活動から始められました。

スウェーデン語で「レコ」遊ぶもの「おもちゃ」と「テク」持つて帰る「図書館」を合わせて「レコテク」と名づけられました。

その後、レコテクは北欧から西欧、アメリカに広がり、すでに世界四十カ国に普及し、現在では四年に一度「トイライブラリー国際会議」を開くまでに発展しました。日本では、一九七五年、大阪にトイライブラリーが開設され、「国際障害者年」を契機にして急速に広がり、現在では全国二百カ所を越えるまでになりました。

高知おもちゃ図書館は、一九八五年に高知県社会福祉センターのボランティアルームに誕生しました。それから二年、週一回の開館ですが、登録者数九十四人、来館者数延八百人、貸出累計三百九十件と利用され、いまは数人のボランティアが交替で世話をしています。



「障害をもつ子どもたちに、おもちゃの素晴らしさと遊びの楽しさを」との願いから始められたこの図書館も、おもちゃの保有数の増加約四百点)によって、今では障害をもつ子どももたない子も、ともに仲良く利用するまで活動が発展しています。精神発達にハンデをもつ子どもたちの中には、「このおもちゃで遊びたい」というねがいや、遊んでいる

時や遊びおわったあとの楽しさ、面白さをまわりの人に十分伝えることのできない子がいます。そのためまわりの人からいつの間にか、この子は、おもちゃや遊びへの興味が薄いのだと決めつけられてしまい、遊びへの欲求も埋もれていってしまいます。

そうならないように、子どもたちにおもちゃや遊びを発見させ、その楽しさや面白さを味わうことで、遊びへの欲求を心の表面に浮かびあがらせ、高めていく必要があります。遊びへの欲求が芽ばえれば、次々に遊びを展開させ、そのなかで子どもたちは、さまざまな力を知らず知らずのうちに身につけていくことになります。

健常児にとっても、おもちゃ図書館はおもちゃを媒体とする遊び場であり、よいおもちゃとのふれあいをとおして豊かな遊びを広げる場、情緒や機能の発達をはかる場であることが第一の目的となります。親がおもちゃへの理解を広め、家庭での子どもの遊びのよき協力者となることなど、おもちゃ図書館のもつ役割は多面的で大きなものがあります。

おもちゃ図書館の中で自由に遊ぶことはもちろんですが、子どもたちへ好きなおもちゃの貸し出しも行っていきます。

いまあるおもちゃ(約三分の一は木のおもちゃ)は、手先を使うもの、

音の出るもの、体全体を使うもの、動くもの、のりもの類、ゲーム類などさまざまですが、特に手先を使うおもちゃに人気があります。おもちゃの語源は「もてあそぶ」からきているといわれ、おもちゃの面は、手を動かすことが原点であるといえます。また音の出るおもちゃがその次に多く貸し出されているのは、子どもが音に興味があり、敏感に反応する側面を示すものといえます。

いつの日にか、公立の本の図書館の一室でおもちゃ図書館が毎日オープンされていて、障害児も健常児もなくみんなおもちゃに夢中で、子どもたち同志で手を出しことばをかけ合う光景。「おもちゃで遊んで本も見て」「本もおもちゃも借りていける」「障害児や車イスが図書館の中を歩いている」——いい光景ではありませんか。

◇

(高知おもちゃ図書館館長)

- ◆場所 高知県社会福祉センター内
- ◆開館日 毎週木曜日
- ◆開館時間 午前十時～午後三時
- ◆利用・貸出し 無料
- ◆貸出し期間 二週間
- ◆おもちゃの寄贈を受付けています。同図書館(二二一六三五六・社会福祉センター)あるいは三橋館長(四一〇九三五)までご一報ください。

# 水と緑と公園のある商店街へ

## おびさんロードの街づくり

小笠原 長男



### 裏町的存在からの脱却

「おびさんロード」は、昭和五十五年六月に正式名称「南帯屋町商店街振興組合」として発足し、七年目を迎えた非常に若い新興の商店街です。

大橋通から中央公園へ至る東西四百メートル、幅員八メートル、総面積三千二百平方メートルの、地形的に大変細長い商店街といえます。県内でもいちばんの繁華街である帯屋町筋や大橋通、また南側を通る最幹線道である本町筋に囲まれ、これらの商店街に来るお客様や周辺のビジネスマンの駐輪場、あるいは商品の搬入道という、補完的役割を果たす、いわゆる裏町のイメージに甘んじてきました。

昭和六十年九月に行われた中小企業大学の商業診断では、「中心商店街の一面として潜在的ポテンシャルは特筆すべき高さ」にありながら、「機能連担が不十分」で「商店街としての精神的、物理的イメージが確

立されておらず未成熟」と指摘されました。

今後は問題意識をもって先進地域を視察し、その結果を組合員に報告、「商業近代化を図らねばならない」という意識を形成したうえで、早急に街づくりに取り組むようにとの勧告を受けました。これにもとづいて組合のなかに開発委員会を編成し、「おびさんロード」の方向性、可能性を模索・研究してきました。

昨年、高知市において中心地再開発事業の一環として、中央公園の地下駐車場および公園再整備が決定されました。

この事業は、東は播磨屋橋を通過して九反田へ、西はおびさんロードを通過して大橋通へという、二つの大きなパイプラインが完成してこそ、経済的な意義があると思われまます。われわれを含めた中心商店街の活性化にとつては大きなインパクトを持つものと考えられ、これに対応した街づくりを進めていかなければなりません。

### 活性化に向けて四つの提言

昨年十月に高知県中小企業団体中央会の「活路開拓ビジョン調査事業」の指定を受け、それを機に開発委員会を発展的に解消し、行政、専門家、組合員ら十二人からなる「活路開拓委員会」を新たに発足させま

した。

その後、半年のあいだに先進地域を視察し、あわせて組合員へのアンケート調査を行いました。「水と緑と公園のある商店街」―これが約九割の組合員が望む「おびさんロード」の方向です。また五回にわたって企画委員会を開き、報告書を作成して次の四つの提言をまとめました。

- ① 既存のクロウズドモール（アーケード街や大規模店舗）とビジネス街の間に位置するという立地条件を生かし、さらに二つの都市公園（中央公園、帯屋町公園）を抱える特性を有効利用するためオープンモール化する。
- ② この通りのイメージを「ファッション性のある、安全な商店街」として、積極的にイメージに合う業種の進出を促す。
- ③ 街区全体のイメージを高めるため、建物の高さ、色彩、広告などについて協定をつくり、また町内活動の拡充を図る。
- ④ ミニバイクや自転車の駐輪対策を講じる。

このような改造計画を実現することが、中央公園の有効利用や、周辺の商店街と連続した回遊性のある魅力ある街を創りだすこととなります。具体的には、電柱の地下埋設や帯屋町公園地下の駐輪場建設を提案し、六十二年度には基本計画の策定に入

ろうと申しあわせています。

### 組合員の問題意識が不可欠

私たちは昨年十月に沖縄市（旧コザ市）の「中央パークアベニュー」を視察しました。

沖縄市は米軍嘉手納基地の門前町として発展してきた町です。ベトナム戦争当時には「三日で家が建った」といわれるほど好景気だったといいますが、戦争終結後は著しく経済環境が変化しました。イメージチェンジによる商店街の活性化を図る以外に、生き残る道はないと判断、昭和五十三年に「センター商店街振興組合」を結成し、買物公園化が計画されました。

私たちはかつてチームを結成して、よさこい祭に参加していた時期があります。祭に参加しなくなつて七八年になりますが、この間に祭自体がいろいろな問題を抱えてしまいました。

第一に参加チーム数がありに多くなりすぎ、競演場で長時間待たされたり、踊るに踊れない状況になっていきます。

第二に伴奏の音量が大きくなりすぎているのではないのでしょうか。ちらほら苦情も耳にします。

第三にハツツとしたところがなく、ただ踊っているだけという踊りも随分あります。踊り子が本当に祭を楽しんでいる感じもこちらへは伝わってこず、これでは見ている方も面白くはすありません。ただ一年のうさ晴らしに、欲求不満の解消のために祭に参加されたのでは、周りのものはたまりません。もっと積極的に、踊りを祭を楽しんでほしいと思います。

## 角のよさこい祭

堀田昌一郎

昭和六十年、全長四百五十メートル、通りの片側にカプセル型アーケードを備え、白色をイメージカラーとした商店街が完成しました。いまも同商店街は売上げの三十分パーセントを米軍に頼っているといえますから、米軍がいなくなったとしたら完全な赤字です。しかし、この商店街を新しく造つたからこそ、昨年来の円高の影響をなんとかかわせたと、比嘉貞信理事長は言います。

比嘉理事長は街づくりに最も必要なものは、「街づくりを完成させなければならぬ」という組合員の問題意識で、これさえあれば街づくりの半分はできたも同然といえます。「組合員のなかで少なくとも五〇六

人は、自分の仕事を放つてもやる人間が必要です。さらにそのなかで、命もいらぬという人間が二人くらい必要です」

現実に初代の理事長と副理事長が過労のために倒れ、亡くなったと聞きました。

「街づくりをするなら、まず最初に墓を建てられたらいいかですか」とに健康には注意して下さい」と理事長はつけ加えました。

私たちは沖縄市を訪れるまでは、街の外観やハード面に関心があったのですが、比嘉理事長の迫力あるお話、精神的教訓が最も大きな収穫となつていきます。高知空港に帰りついたときには、私たちにだつて街づく

私たちが参加していたころは、それまでの一般的な振り付けや音楽から脱皮しようと、チームの中で様々な議論をしました。祭とは何なのか、高知らしさとはどういうことか、踊り子や見物人も一緒に楽しむにはどうすればいいのか等々。他の祭のコピーではなく、独自のリズムやステップを考えたり、観客もすぐに参加できるような振り付けなども試みました。

### 早急に話し合いの場を

私たちの試みは少なからず他のチームにも影響を与えたようでしたが、表面的に受け取られた観があります。単にメンバーを増やし、踊りを今風にし、音を大きく、リズムを他から借りてくる、どうもよさこい祭らしさがどこかへ行ってしまったような気がしてならないのです。

いまこそもう一度、それぞれのチームの主権者は、なぜ踊るのかという祭の原点を考え、高知独自のものを生み出してほしいと思います。

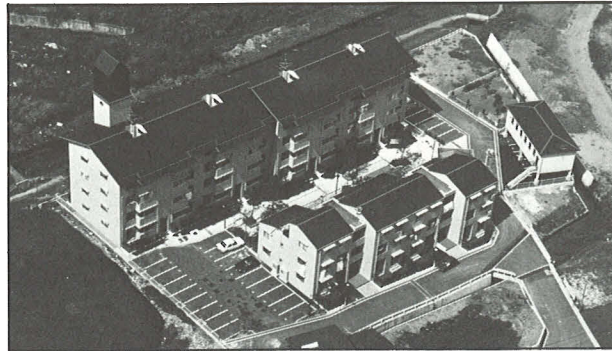
いろいろ好きなことを書きましたが、要するに踊り子の素敵な表情を見せてほしいのです。みんなが本当に楽しめるよさこい祭であってほしいのです。このままでは、今年がとて不安です。

競演場や音量の問題、賞の設定など祭全体のことを、参加者や一般の人たちも交えて自由に話しあえる場を、できるだけ早い時期に、祭を主催・運営される方々に設定していただきたいと思えます。参加申込みのあとではおすまじです。充分な時間をかけなくては、素晴らしいよさこい祭にはならないと思います。また、祭のあとの反省会も必要ではないでしょうか。今年がよさこい祭の最後と同時に、来年のよさこいは始まっているのです。（堀田商店）

# 新しい都市美の創出をめざして

—高知市都市美デザイン賞三年間の歩み—

都市美創出のモデルとなる優れた建築物を顕彰する、高知市都市美デザイン賞も三回を数えました。今後ますますこの賞が発展していくために、いま一度この三年間を振り返ってみたいと思います。

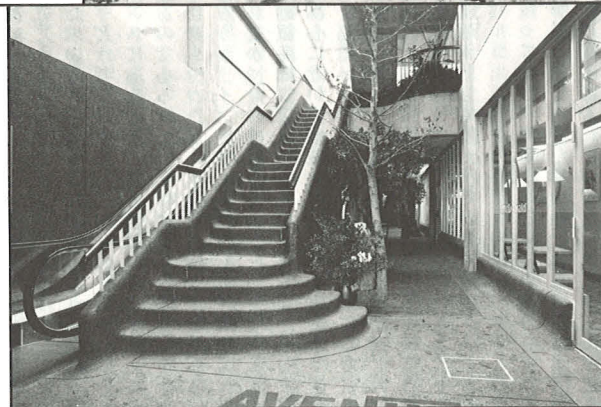


第一回入賞 ● 針木東グリーンハイツ  
高知市朝倉・(株)小谷設計

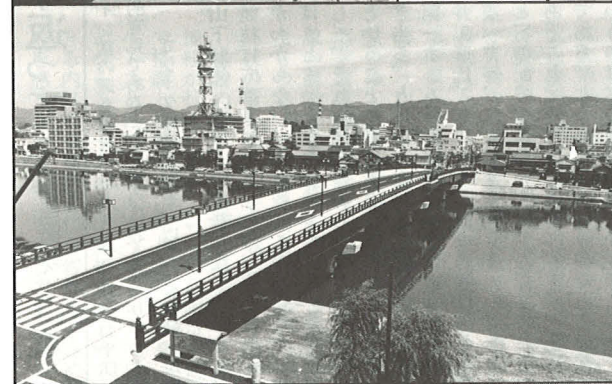
第一回入賞 ● 高知市寺田寅彦記念館  
高知市小津町・上田虎介(故人)設計監修



第一回入賞 ● 五台山モノレール跡地建物  
及びランドスケープ  
高知市五台山・(株)GM造園設計事務所



第二回入賞 ● 広末ビル (AVENUE)  
高知市帯屋町・(株)千頭建築研究所



第三回入賞 ● 天神大橋  
高知市唐人町～天神町・(株)日建設計

第三回入賞 ● 高知ぢばさんセンター及び  
高知県中小企業会館  
高知市布師田・MA設計事務所



# 芽ぶく高知の出版文化

県内出版目録づくりを通して

細迫 節夫

「わしらの本は中央の本のようにカッコイイもんじゃないぜよ。わしらの中にはプロを目ざしたもんもあるかもしれないが、そんな集まりじゃない。ただ書くのが好きで、詠うのが好きで、やりゆうだけで、内容はざっとしちゆう。そんな本でも、おまん載せるかよ」

文芸誌を作り続けているというおんちゃんからの電話を切って、改めて文化というものはこういう人達によって支えられているのだと思った。おそらくこうした著者たちは、どんなベストセラー作家よりも悩み、葛藤し、自らの歩みや事件、想いや哲学を活字にしていたのだ。文章をまとめあげるだけでなく、写真や資料の選択、校正や印刷屋さんとの交渉にどれだけ苦労しただろう。それらの本が、あまりにも頼りなげに綴じられ恥ずかしそうにしている。

もし文化というものが、豪華さや話題性に置きかえられてしまいうなら、巨大な資金力やマスメディアには永遠に歯が立たず、相対的に地方の文化は低いままである。流行のスタイルを身にまったり、テレビで見られる文化に違いないが、自らのことや地域のことをこつこつ記した本にこめられた努力を、育てるべき地方の文化の芽と見るのは身勝手だろうか。

芽からどんな花が咲くのか。芽や花は見る人によって違うので、どう利用されるのかわくわくするが、目録づくりには大きな不安があった。一度、失敗していたからだ。昭和五十三年より発行している教育文化誌「なんぶう」第三号で、地方の文化の灯・自費出版の書籍を育てよう」と情報交流の場をつくり呼びかけたが、自分が調べた出版物ばかりで、一冊の本も寄せられなかった。

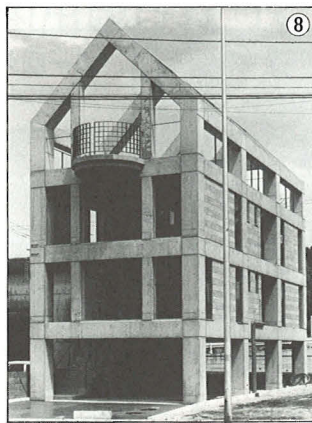
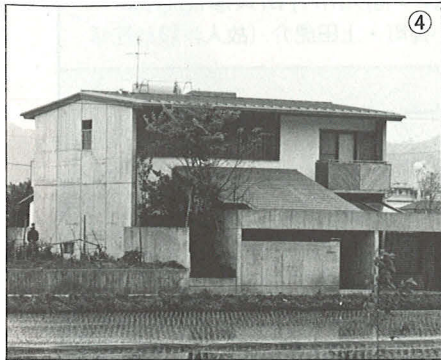
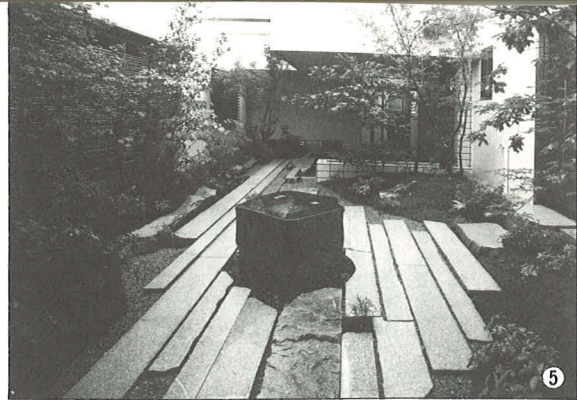
二千部発行の「なんぶう」も教育界の狭い範囲にしか出回っていないからとなくさめながらも、心の奥底では「せつかく他人の本を載せて紹介するといっているのに、本を送ってこない奴が悪い」と思っていた。私こそ、月光仮面式の考えを捨ててしかなかった。呼びかけて終わりにせずに、二度、三度と案内させていた。だくこともあった。

現在編集を進めている出版目録は全国的にも画期的と自負しているが、問題も残している。一つは言うまでもなく、目録づくりを毎年続け、さらに極力すべての出版物を集録することで価値を高めてゆく必要がある。同じ出版物も著者が一般庶民であることにより再び闇に消える可能性がある。地方から生まれた情報・財産として保存（たとえば県立図書館や他機関で）し続ける必要があるだろう。

さらに目録と著作物を利用しやすくしていく必要がある。たとえば図書館でカードによる検索の手間を省き、この目録を見ただけですぐ目的の本を請求できるように、図書館と共通のコードを入れておくとか……。また自費出版の中には販売したいという強い要望をもったものもあり、目録がそれを積極的に応援できるようにしていくべきだろう。書店が著者に直接注文を出す時、送料をどちらがもつかのトラブルも考えられ、共同の卸センターの設置などが必要かもしれない。とにかく県下各書店との連携の問題があり、書店と共催の「県内出版物フェア」も考えられる。

最後に、この目録が県内出版物・印刷界の活性化に貢献することを願うが、その点からも目録製作を南の風社単独で続けることをよしと考えない。赤字を出す事業では誰も引き受け手がいないと思い、通信費は著者、印刷費は広告、労力は南の風社でとし、赤字を出さずにすんだ。来年は共同の事業となることを願っている。私達はさまざまな機会を通じて、こうした提案を続けていくつもりである。県下各地にはすばらしい芽、エネルギーがある。それらが思ってもみなかった可能性を広げ、新しい方向を示してくれることを信じるのである。

(南の風社代表)



# 高知市都市美デザイン賞をふり返って

建築家 山本 忠司

過去三年間、高知市都市美デザイン賞の選考委員の一人として、そのお手伝いをさせていたのだが、以下の小文は私の個人的意見であることを始めにおことわり申し上げておきたい。

ゴシック体は物件名、以下写真番号・所在地・設計者名

## 第一回

四国横断自動車道高知職員宿舎（比島・山中幸氏）都市の持つ個性的文化論ということについては、私なりに考えていたところ、この職員宿舎は現代建築の世界にあって、何処のまちな中にあっても決しておかしくない水準のものであると見受けた。南面のスペースも広くとっており、その処理も決して悪くはない。ただもう一つ何かの表現が欲しい、そう願うのは私一人だろうか。

高知市水道局庁舎①（棧橋通・MA設計事務所）目抜きの大通りにある庁舎であるし、大変に頑張って密度の極めて高い建築をまとめた。ただ、最も重要なファサードのデザインはあの形で成功したであろうか、大変苦しみ抜いた末の形であろうけれども、もう一つ割り切れないもの、どう考えても分らないものを感じた。それは形のバランスにあるのか、窓と壁面とのデザインのおさめ方にあるのだろうか、私にはよく理解できなかった。作者ご自身もやったという実感は持っておられないのではなからうか。インテリアについても、割り切れた解決が見られなかったのは残念であった。

第一勧銀高知支店丸の内アパート②（丸の内・小松信利氏）都心に近い住宅地で、設計から施工まで極めて無難にこなしていた。住みよい明るい建築、ただ賞ということになるともう一つ何かの打ち出しが必要。

岡崎邸③（伊勢崎町・山本長水氏）第一種住居専用地域の中の住宅として、それをRC（鉄筋コンクリート）造の3階建単体として仕上げている。コンクリートと木と、外部バルコニー廻りの手すりの白いパネルとの構成が印象に残っている。周囲にある木造建築の中にあってもそれ程特異な感じを持たせないとこの建築のよさである。賞にはもれたが、コンクリートに木をうまく結合させた手法はすぐれたものを持っていた。

## 第二回

山下邸④（高埴・山本恭弘氏）この作品が、住宅の設計競技に応募されたとしたら、その賞の行方はどうなったかわからない。それ程にこの作品は、単体の住居としてはまとまったものを持っていた。都市を構成する要素として、それが都市の美しさにどこまで協力しているか、ということを考えて、極めてよくわからないものにつき当る。とにかく高い水準を持った住居作品。

第一ホームラン庭園及びランドスケープ⑤（知寄町・石井忠彦氏）とにかく、その庭園計画と仕事、石の選定、並べ方等、うますぎる位うまいのである。樹木の植え方と石の配置等についても。ただこのお店が、遊技施設であること、それは若者のエネルギー発散の場であることである。どうも、それは静的であり過ぎはしまいか、というのは私の見解の誤りかも知れない。

タウンハウス海老川⑥（朝倉・細木茂氏）公的なRC造の二戸一棟住宅、コンクリートの固さを感じさせないのは屋根を瓦葺としていたためだろうか、一見木造住宅を思わせるものを持っている。外構に変化が見られるのは、二戸を直線ではなく喰い合わせた基本計画による。中央のコモンスペースも全体の中で生きている。

特に見せかけもなく、無理なおさまりもなく、坪みの屋根が環境とうまく調和していて計画が遊離していない。まだ団地としては、建設の途中であったが、完成後も一度提案されてはどうだろうか。

矢野小児科医院改装工事⑦（上町二丁目・山本恭弘氏）古い病院に手を加え、視覚的にも新しく蘇らせるという極めてユニークな試みで、消化の仕方も大変にうまい。ただこのような試みは、本質的なものをそのまま素直に見せるということと、それをもう一つの表情のものとして見せるという手法、われわれが建築に取り組んで来

た過去の道程を少し修正して、建築を時間の経過と共にその表情を変えて見せるという試み、その辺の答がまだ出ていないという不勉強さを痛感させられる。インフォーメーションのデザインはあれでよかったのである。最後にはそれが若干気になった。

みかづき文化会館（万々・小谷設計）ローコスト建築が一見して理解できた。それにしてもあそこまでまとめた努力は大したものだ。ただ塔屋の内部まで細かく見せてもらった結果、そこでの機能に若干の疑問を持った。

小谷設計ビル⑧（介良・小谷設計）コンクリートと硝子であそこまでまとめた手法は並ならぬものを持っている。漸新な表現力には感心させられたが、住宅等の小品の単位を賞の対象としなかったこと、それは都市美としての構成要素としては弱いということであつたかと思う。ただこの作品につき建築としての機能性について細く見ていると、屋上の手摺下から子供が簡単にこぼれるであろうと思われることや、開口部には硝子の大きな一枚板を入れ、明快におさめているものの、自然の風の導入については考えなかったのか、といった疑問が残った。パレスハイツ萩野（一宮・小谷設計）集合住宅としての設計はうまくまとめた。ただ色調が全体にダークでしっとり落ちついた表状を持たせていた半面、入居者につめたさ、暗さを与えはしまいかと心配であった。ローコストであそこまでまとめた力量は評価できる。

ジャストタイム（高須新町・千頭建築研究所）以前倉庫であった建物を店舗として改造したもので、あまり金をかけず、モダンで効果的な方法をとって成功。

## 第三回

国鉄朝倉駅⑨（朝倉・佐藤昌平）国鉄が民営化に向けて起死回生の努力を払っておられることは敬意を表するものである。この建物、即ち朝倉駅もロッキングキャビンシステムを採用し、その内容も外観についても、大変ユニークなものとして生れ変っていた。

木材県高知の原木素材をそのまま積みあげ組み合わせ、親しみやすく、あたたかくかつほのぼのとしたものを感じるところにこの建築の成功している点があると思う。また、建築的な立場から眺めても格調の高いものを持っている。ただ賞を与えるかどうかということとなると、も

う一つひっかかることは、建築的創造性もしくは独創性ということであろうか。

サンセット⑩（鴨部・水野淳一氏）地下の部分を含めると三階建となるこのコンクリート打放しの建築は、三棟をプロムナードで結び、適度なオープンスペースもとりながら、巧みに計画してある。ただ私が気になったのは、前面道路と建物との関係にも一つ問題があるように思われた。即ち前面の道路が、通過交通的な色彩が強く、だとすれば、建物と道路との間にもう一つのクッション的なスペースがあればと思われたが、それは結局も知れない。あの乏しいスペースをよく工夫してあそこまで持っていた努力は買わなければならぬであろう。

もう少し店舗が入居して、全体像が出て来たとき、公共スペースと店舗部分との取り合せについても一度見せてもらいたいものである。打放しコンクリートについては、背後が抜けていて建て込んでいない地域だけに、もう少し暖かさがあってもよいのではなからうか。

高知市・北見市姉妹都市提携記念広場（農人町・石井空間研究所）北海道への移住団が明治三十年に出発したその土地につくられたモニュメントである。普通この種の記念構築物としては、石碑形でシンボリックな石を立てて碑文を彫り込んでつくられるが、ここでは平面的な広がりの中に形を設定しており、その形としてのまともは大変にうまい。ただ賞が与えられなかったのは、堤防用地の横への連結性がここで断絶されたことによるためであろうか。その考え方が是非か、論議としてもう少し煮つめておく必要があるように思われた。

追手前高校多目的ホール⑪（追手筋・日建設計）高等学校の講堂と音楽堂とを兼ねた多目的ホールとしてまとめたもので、そのこと自身は意義あることで、これからの高校の新しい方向を示唆しているものと考えられる。

建物の設計は、計画からディテールまで、大変に細い神経が行きとどいていて、日曜市が開かれるまち並の中で格調と品格ともにあり、前庭となっている植え込みスペースとのバランスももうまくいっている。ただ賞の対象とならなかったのは、高校生が若いエネルギーを放出できる内外の空間構成に色彩計画も含めて喰い足りないものを感じたのは私一人だけであつたであろうか。

# なぜ英語しゃべれないの??

森木 房恵

筆者は国際電信電話のオペレーター、パンアメリカン航空を経て、現在高知市に在住しながらユナイテッド航空のステュウワースとして活躍されています。その長い国際経験から見た日本や、世界の働く女性たち、子どもの教育などについて三回にわたって連載していただきます。

## アグラス オブ ラモナイ?!

私をはじめ日本を出てから十七年、目の前の一つ一つの仕事に夢中で、西に東に地球の上を飛び回っている間に、ふと気がつく、日本とそれを取りまく状況の何と変わったことか……。

一九七〇年八月二十八日、ロスアンゼルス発バンナム八一便ホノルル行き——これが私の初の実地乗務訓練。五週間にわたるマイアミでのトレーニングを前日に終え、さあ、いよいよやるしかない!!

無事離陸して、客席を回って飲物のオーダーを取る。体格のいい男が「アグラス オブ ラモナイ、プリーズ (ラモナイを一杯下さい)」という。分らない。「ラモナイ」というのはトレーニングの中で聞いたことがない——さあ困った。後ろのギャリー(調理室)から同僚がとんできてくれた。彼女が「レモネイドならセブンアップスでいいですか?」と訊く。この紳士「オーカイ」。ハア? オー! O・Kをオーカイと発音するのはオーストラリアだ。それにしても「ラモナイ」は「ラムネ」の語源として納得できるではないか。

乗客の一人がコーヒー片手に私の出身地を聞いてくる。ヒューストン出身というこの大男のあげる国は、香港、

外に出てくる勢いを外から見つめる気持ちは大変嬉しかった。ひとりぼっちで日本を知らない乗客に囲まれていた日がウソのように思えた。

しかし、喜んでばかりいられない問題も一つずつ目のあたりにするようになった。

あまり急に海外旅行が一般化したので、初期の旅行者のように、せめて聞きとろう、話してみようという意識さえ無い人がドッと増えた。またコーヒーをたのんでも「プリーズ」も「サンキュー」も言わない日本人は、マナーを知らないと思われてしまう。

人間関係をスムーズにする気配りは、外国に出たら特に大切だと思う。自分では何とも思っていないくても、自分の態度ひとつが日本人ひいては日本という国への印象や評価になってしまうことがあるから。

## 十年間英語を習ったけれど……

旅はどこに行つて何を見るかも大切だが、その中で誰に出会うかで全く違ったものになる。概して日本人はシャイ(恥ずかしがり)な性格が災いして誤解されやすい。

飛行機の中で知り合った者同士の話の輪から日本人だけ外れていたり、周りの誰とも挨拶もせずすれ違う団体観光客を見たりすると、とても残念に思う。

この原因はシャイな性格の他に、もう一つの大きな理由、言葉の問題であろう。私達は中学・高校・さらに人によって大学と十年間も英語を学びながら、どうしてほとんどの人が英語を使えないのか?

今や日本は世界のリーダーの一員であり、人の意見を聞いてさらに自分も発言し、その上で相手を説得できなければ役に立つ英語とは言えない。ビジネスであれ観光であれ、伸び伸びと自己表現できてこそ語学を習った本当の価値があるし、コミュニケーションこそ、言語の本来的役割であると思う。シェークスピアは読めるが、幼

タイ、韓国、フィリピン、マレーシア——はじめはジョークかと思つて「ノー」をくり返して楽しんでたが、本気で当てようとしていくらしく、複雑な気持ちになった。「スシ食いねえ」の森の石松じゃないけれど、一つ大事な国を忘れてやしませんか?——やつと七番目に「ジャパン?」「オプコース」。日本という国の認識度が高くなるものとは信じられず、内心ショックであった。同時に自分の中に愛国心を見出した思いがした。

## 日本が海外に雄飛する日

トレーニング中、私達は日本、香港、ハワイの出身者二十五人からなるオリエンタルクラスにいたが、「あなた達は、今後のアジア人旅行者の増大を見込んで採用された云々」の歓迎スピーチが、印象的に思い出される。こんな、日本がどこにあるか分からないような乗客ばかりの機内に、本当に日本人がそんなに沢山海外旅行する日がくるだろうか……?

私の疑問はフライトごとに消えていった。ジャンボジェット機の就航とともに、太平洋路線は日本の乗客が増え、ホノルル—東京間は日本人の方が多いくらいになった。

そしてこの国のどの街角にも日本製の車やカメラの広告が目につくようになり、日本がどんどん発展して海

稚園程度のことでも話せないという、日本人の英語のアンバランスは外国人には理解できない。

日本人全体があらゆる分野と立場で、世界と理解し合えるようになることが、今後の日本の重要な課題であることを身をもって感ずる一人として、英語教育のあり方には無関心でいられない。

## 聞こえること、心が通じること

もう十年も前から文部省は中学校の指導書に、英語を学ばせる第一のねらいとして「聞き、話し、読み、書く能力を養う」とはっきり書いてある。国の発展と英語の必要性に較べて、その効果の上がり方は実に遅れている。一般に人間は思春期が始まると、右脳で音を、左脳で文法をといて具合に分かれてしまふといわれる。だから子どもの頃は音に馴れてどんどん言葉を覚えるけれど、一旦思春期に達すると言語獲得が難しくなる。

早期英語教育が全員によいという訳にはいかないが、少なくともできるだけ早い段階で音韻のパラエティに馴れさせることは大きな成果があるようだ。日本語のアイウエオの五つの母音に耳と頭が馴れ固まってしまうと、二十一年もある英語の母音の聞き分けと発音を、日本語に置きかえてしまうので不正確になる。とりわけ思春期特有の恥ずかしさが加わると、なかなかきはきは口が開いたり、舌を出したり出来なくなつて細かい声になり、結局そのまま大人になって、人に聞こえない通じない英語で終わってしまうことが多い。

今や世界では二十億の人が英語を話すといわれ、私の「ラモナイ事件」のように各国様々のなまりやアクセントがある。日本人だつて少々日本語のアクセントがある英語を喋って構わない訳で、堂々とどんどん話したい。一番大切なのは相手に聞こえること、そして心が通じること。そのために英語を学んで、世界の輪にとけこんでいける日本であつてほしい。

## 高知市近代年表 (五)

- 1・23 明治二十五年(一八九二) 植木枝盛没す(三五歳) 県下に保安条例施行
- 2・9 第二回衆議院議員総選挙で政府大干渉を行う。(土佐では死者七人、負傷者六十八人)
- 2・15 自由党九十四人、改進黨三十八人が当選。
- 7 市役所、新庁舎に移る(現在の場所)
- 7・25 黒岩周六(涙香)、東京で「万朝報」を創刊。
- 11・1 〇この年、高知汽船と土佐運輸が合併し、土佐郵船会社が設立される。

- 3 明治二十六年(一八九三) 高知県立病院廃止
- 3 町田且龍、高知病院設立
- 4 潮村大島に市立避病院設立
- 7 土佐鉄道協会結成(四国鉄道敷設の促進)
- 9・5 堀詰座、株式会社組織になる
- 10 明治二十七年(一八九四) 鏡川橋竣工(旧杵田村一鴨部村)
- 2・25 第三回臨時総選挙(自由党百十九人、改進黨四十八人、国民協会二十六人)
- 3・1 土佐商工連合会組織
- 3 高知毎日新聞創刊
- 3 日清戦争始まる
- 5・25 久礼町大火(百八十戸焼失)
- 8・6 開戦にともない全国で生じた義勇軍結成の動きを戒める詔勅発せらる(高知でも八百人が集結)
- 8・8 第四回臨時総選挙(自由党百五人、改進黨四十五人、革新

- 9・1 四十人、国民協会三十人) 〇この年、四国循環県道竣工
- 1 明治二十八年(一八九五) 大日本赤十字社高知委員部を支部に改める
- 2 投書文芸誌「青年文」創刊(主幹・田岡嶺雲)
- 2 金光教高知教会所を浦戸町に設置
- 3 追手筋に市立高等小学校開設
- 3 日清講和条約調印
- 4 独・仏・露三国干渉
- 4 一円正興、市長に再任さる
- 4 帯屋町勸業場内に羽二重伝習所を設置(織機二十五台)
- 5 高知県勸業諮問委員会発足
- 5 明治二十九年(一八九六) 進歩党結成
- 6 国立第七、第八銀行合併して土佐銀行設立
- 6 土佐紙業組合設立
- 6 アテネで第一回オリンピック開催(一四・一五 十三カ国、二百八十五選手参加)
- 6 坂垣退助、内務大臣に就任し、自由党総理を辞す
- 6 土佐貯蓄銀行設立
- 6 国立第三十七、第二百二十七銀行合併して高知銀行設立
- 6 土佐水産株式会社設立
- 6 陸軍歩兵第四十四連隊の朝倉設置を決定
- 6 明治三十年(一九〇七) 羽二重伝習所を廃止して模範工場を設置
- 6 高陽銀行設立
- 6 後藤象二郎逝去(六〇歳)
- 6 山地元治逝去(五九歳)

- 8 〇この年、坂本直寛、沢本楠弥らが北海道北見に北光社設立
- 8 4 高陽銀行設立
- 8 後藤象二郎逝去(六〇歳)
- 8 2 山地元治逝去(五九歳)
- 3 〇この年、坂本直寛、沢本楠弥らが北海道北見に北光社設立

# 流れのほとりて 長谷部 伸作

## 四万十川ブームのなかで

“日本最後の清流”として、四万十川が脚光を浴びるようになって数年になるが、このことは私たちにとってどんな意味をもつのであろうか。現代は祭の時代、イベントの時代といわれるが、四万十川ブームもまたこの流れの中の一つではないだろうか。展望台や遊歩道、レーザー光線や打上げ花火に彩られた、観光資源としての四万十川だけが、本当の四万十川のすがたではない。

高知市から西南へ約七十キロ、高原の街、窪川は人口約一万八千人。海岸部への原発誘致問題で揺れ動いてはいるが、標高二百メートルから三百メートルの台地の中を、数々の渓谷、支流を集めながら四万十川本流がゆるやかに蛇行する、まぎれもない四万十川流域の里である。

流域に生れ育ち、居住する私たちがまた、この風土と文化の中に生きてゆかねばならないのである。しかし現在の状況は、この川と私たちの関わり方の上に、いろいろな変化と問題を投げかけてきている。

### 自由大学運動の理念のもとに

溪流でアメゴ釣りを楽しむうちに「自然」を考えるようになったグループの『溪流会』（昭和五十四年発会・十四名）、一方では四万十川流域に関する各分野で個人的に研究を続けていた人々が、学際的な研究交流、学習の場として集まった「窪川・四万十川の会」（昭和五十九年発会・二十名）、この二つの会に共通の会員の発議で、高知大学名誉教授甲藤次郎先生の指導を受け、「四万十川大学講座」の構想が生まれた。

撮影・昭和六十二年四月七日



# 私の風景

## 御幸橋 入交貞悦

仕事の途中でときどき通る御幸橋界隈。このあたりは、江ノ口川流域のなかでも桜の季節ともなれば、見事な花が咲きそろう。橋の南西のたもとには、何やらいわくありげな祠があり、朝、犬を散歩させる人たちがのんびり歩く姿も見受けられる。

「学ぶということとは生活に結びついた一生の営みであり、人間のあり方そのものであって、世に出るための手段としての学校教育、学歴ではなく、自己目的な成人教育こそが本来の学習である」「大学は建物でも制度でもなく、学びたい人とこれに応える人との集りである」という自由大学運動の理念を範として、スポンサーのいない、自前の「手づくり」で運営していくことになった。四万十川を中心にした各分野の講座は隔月開催の十回（会費一万円）で、会員を募ったところ、四十五名の参加者があった。講師の先生方のご協力によって昭和六十一年四月に開講し、あと三回を残すのみである。

### 新しい地域文化の芽ばえ

今年三月に実施した座談会とアンケートによると、「自前で学ぶことの評価」「学ぶこととそれによって生じた人間交流のよろこび」「四万十川の再発見」「地域文化の再認識」「自然保護と環境問題」「郷土資料の保存」「他所から見た『最後の清流』ではなく、われわれの生活からの視点が重要」など多くの意見があった。特に「この講座を十回だけで終らさず、何らかの形で継続したい」という声が強かった。

学びたい人がおり、それに応えてくれる人がいるならば、続けるべきであろう。それは大正から昭和へと

- 講座内容
- 一回 身近な地質と四万十川をめぐる諸問題
  - 二回 (甲藤次郎・元高知大学) 土佐に於ける緑と川の文化史 (広谷喜十郎・県立図書館)
  - 三回 四万十川流域の淡水魚 (落合明・高知大学)
  - 四回 四万十川流域の庶民の生活 (橋田庫欣・郷土史家)
  - 五回 四万十川のおいたちとその特徴 (西和彦・高知商業高校)
  - 六回 四万十川流域の民話 (市原麟一郎・土佐民話の会)
  - 七回 四万十川流域の野鳥 (沢田佳長・宿毛高校)
  - 八回 四万十川と文学 (土佐文雄・作家)
  - 九回 四万十川と民間信仰 (中平大世・郷土史家)
  - 十回 四万十川の水生昆虫 (古屋八重子・昆虫研究家)
- (以上終了)

流れて消えることのない自由大学運動の理念であり、四万十川大学講座運営の理念でもある。学ぶことによって自然と人間との関わり方について、より確かな考えも生まれてくるであろうし、地域の文化を受け継ぎ、新しい文化を創造する活力も生まれるのではないか。

文化は生活の中から自ら創り出していくものである。このささやかな四万十川大学講座の営みの中から新しい地域文化の芽が生じることを期待したいものである。

(四万十川大学講座運営委員)

## 山崎 道

スニーカーのへりぐあいを、旅先より、友人に書きつづった一節がある。めったに来ぬ友の便りは、時折、旅の便りであったりする。近況報告だろうと思う、旅先の言葉は、詩人のひびきと、なんとも理解できぬ暗号が飛びかっている。現役旅人として、放浪している友たちに「昨日、歩いた道と同じコースを歩きますか？」なんて質問してみたくなる。

旅先で得た感覚が音にあるらしいと告げていた友が、いつのまにか、音のパフォーマー鈴木昭男さんの「日向ぼっこの空間」というサウンド・プロジェクトに参加していた。その仕事というのは子午線の通る京都府網野町の(日本海牧場)に、今年の春からブロックで壁を築く。そして、秋分の日、一回限り、太陽がのぼって沈むまで、自然のなげかける



音を、その壁にむかって聞くのである。この掛け替えのない一日のために、何日も、何ヶ月も積みあげていくのである。

音がつくりだす、時間や空間や現象、自然を考えながら、模索している友の腰のすわった旅人ぶりに感心する。質問の回答は、いつであるかわからないが、歩いていることは、まちがいないらしい。どんな土地にいても旅の発見は、忘れられぬもので、そして、腰をすえて生活するうえで、必要な香りである。

## 記憶 (R)

時に感じる感覚や、人間の位置を思い、毎日の時間が飛ぶ様に過ぎていきます。さまざまな人々の創造力の絶大さ。自然の中の長い時間の流れ。そして、自分を成り立たせている友人たちの重さ。またまた、身にしみいる思いです。

高知のかっこいい、そのまんまの自然のなかで、(掛け替えのないこと)に、興じ、旅人の気持を忘れずに、深呼吸しながら、生活していきたいものです。

(SIN研究室)







土佐が生んだ文人画家、江戸南画の祖

# 中山高陽展

〈主催〉  
高知市文化振興事業団  
高知県立郷土文化会館

〈会場〉高知県立郷土文化会館  
〈日時〉四月二十四日(金)～五月十七日(日)

午前九時～午後五時(月曜日休館)  
〈入場料〉一般七百元、高大生四百円  
小中生三百円

◆ 出品作品多数のため、会期中(五月五日)に一部を除き作品の入替えを行います。

◆ 同時開催の「女性の美―近代美人画名作展」もごらんになれます。

醉李白図(中山高陽絵はがき)

江戸南画の祖とも称される、中山高陽は享保二年(一七一七)に、高知城下堺町の商家阿波家の次男として生まれます。長じて江戸へ出て文人画家として活躍、安永九年(一七八〇)土佐へ帰る船中に病没し、その六十四歳の生涯をとじます。

高陽展はこれまでも数回開催されていますが、今回は高陽の最高傑作の一つといわれる「蘭亭流腸図巻」をはじめ、掛軸、屏風など約七十点が展示され、内容・出品点数の上でもこれまでの最高となっています。お誘いあわせのうえ、ぜひご来場下さい。

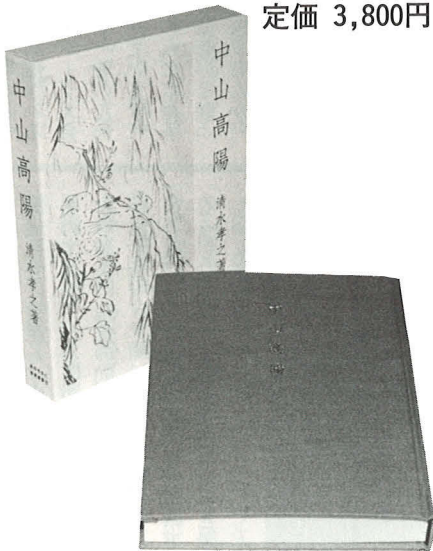
## 中山高陽研究三十年の成果

### 清水孝之著 中山高陽

● 好評発売中 ● 〈限定出版〉

A5判変型・化粧箱入・335頁

定価 3,800円



● 蕪村研究家として著名な清水孝之教授が、近年あまり省みられることのなかった中山高陽について、さまざまな角度から検証し、三十年の研究成果をまとめた力作です。日本の美術史のなかで忘れられがちであった高陽の足跡が鮮やかに浮き彫りにされています。

巻末に書簡集、資料集、年譜を付す。

当事業団のほか市内主要書店でも発売していますが、限定出版のためお早くお買い求め下さい。

### 中山高陽絵はがき

● 今回の「中山高陽展」にあわせて、「中山高陽絵はがき」(一枚五十円・十枚組五百円)を発売しています。「醉李白図」をはじめ「陶淵明図」「山水図」などを収めたものです。高陽展の記念として会場で、あるいは事業団にてお求め下さい。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL (〇八八八) ⑦③四三三六五

郵便振替 徳島 8 1 4 8 6 9